

# 公開シンポジウム

## 阪本公美子（司会）

日本の国際協力シリーズ出版記念シンポジウムへのご参加ありがとうございます。時間になりましたのでただいまより、宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター主催、NPO 法人アジア・アフリカ研究所共催『日本の国際協力 アジア編、中東・アフリカ編・中南米編』出版記念シンポジウムを開催させていただきます。シンポジウム冒頭に、『日本の国際協力』シリーズ出版の監修を手がけて頂きました、藤田和子先生からお話頂きたいと思います。藤田先生は宇都宮大学の名誉教授でいらっしゃいまして、元国際学部長を務めていらっしゃいました。現在は、NPO 法人アジア・アフリカ研究所の監事をされています。どうぞよろしくお願いいたします。

## —日本の ODA 概要報告—

### 藤田和子（元宇都宮大学国際学部長、NPO 法人アジア・アフリカ研究所監事）

ご紹介頂きました、藤田です。本日は、宇都宮大学のキャンパスを頭に思い浮かべながら皆さんとお話をしたいと思います。私は現在、NPO 法人アジア・アフリカ研究所で東アジア・東南アジア研究に携わっております。アジア・アフリカ研究所はさほど大きな学術組織ではありませんが、このほど宇都宮大学の先生方、大学院生、修了生の皆さんを含む多くの方々にご協力頂いて、『日本の国際協力』シリーズ全 3 巻をミネルヴァ書房から世に問うことができました。地域別にアジア編、中東・アフリカ編、中南米編という 3 巻構成で、執筆者総数も 100 名を超す大部の著書となりました。研究者だけでなく、国際機関や NGO など国際協力の現場の活動家など幅広い市民にご賛同、ご協力頂いたことを感謝いたします。

藤田和子（宇都宮大学名誉教授、元国際学部長、アジア・アフリカ研究所監事）



### シリーズの趣旨

- ・ 国際協調主義を掲げた戦後日本は、政府開発援助 (ODA) を通して世界の発展途上国とどのように関わってきたのか。
- ・ 各国の経済発展や福祉向上のために、試行錯誤や批判も浴びながら、いかなる援助を行ってきたのか。
- ・ その形成と展開、現状と事例、課題と展望から解明し、21世紀の日本の国際協力の課題を考えるための基礎的判断材料と論点を提供する。

まず、本シリーズ刊行の趣旨をご説明します。私どもが選定したメインのテーマは、戦後日本が政府開発援助（ODA）を通して、世界の発展途上国・地域とどのように関わってきたかを明らかにすることでした。それはまた、日本から供与された ODA が、世界の途上国・地域の経済・社会の発展にどのように寄与したかを明らかにすることでもあります。日本の ODA の効果を非常に幅広い分野で、時期的にも長いスパンで分析することになりますから、対象国・地域の歴史と現状を熟知しておられる方に執筆をお願いしました。日本の ODA を短期間受け入れた実績のある国・地域を含めて、本シリーズの対象国はほとんど漏れなく網羅することができましたから、ハンドブックとしてもぜひお使いください。

## アピール・ポイント

- ・ 各国・地域の経済・政治・社会の歴史的展開といった包括的・長期的な視野の中で、日本のODAを議論
- ・ グローバル・サウス（アジア、アフリカ・中東、中南米）をほぼ全て網羅して執筆され、日本の国際協力の論点を提供するハンドブックである。
- ・ それぞれの対象国・地域を専門とする、現場を熟知している第一線の研究者・専門家・実践者といった錚々たる著者陣が、独立した立場で執筆していること。
- ・ 日本の国際協力について学びたい大学生にとっても、示唆的な情報を提供し、さらなる関心の喚起につながる

ODA に関しては、外務省をはじめとする中央省庁から毎年、詳細な年次報告書等が公刊されております。特に近年は、従来のお役所の枠を超えるような情報公開が一般に求められるようになりましたので、青書・白書類も次第に工夫がこらされてきたように感じます。政府報告書、評価書等の透明度が高まることは、私どものような研究者だけでなく、日本中の国民の願いではないかと思われませんが、国際協力のプロジェクトの多くは多年度におよぶ上に、教育、医療や貧困削減など効果がただちには見えにくい社会開発プロジェクトの重要度が高いこともあって、単年度の報告・評価には若干なじみにくいかもしれません。こうした点も勘案して、私どもの『日本の国際協力』シリーズでは、長期的スパンで分析をおこない、評価を出しております。全 3 編のいずれの国・地域にも「ODA の現状と事例」と題する項を設け、ODA 受け入れ国にとって良い事例と、良くない事例を具体的に挙げて検証しているのは、その一環です。「良い」「良くない」は、対象国・地域の専門家として長年調査研究にあたられた執筆者、あるいは ODA の実務を現場で担当された執筆者と、各編の編者による総合評価です。そうした努力が報われ、世界中の発展途上国・地域への日本の国際協力の今後を、ODA という太い柱を中心に考える際には、本シリーズが絶好のハンドブックになることを期待いたします。

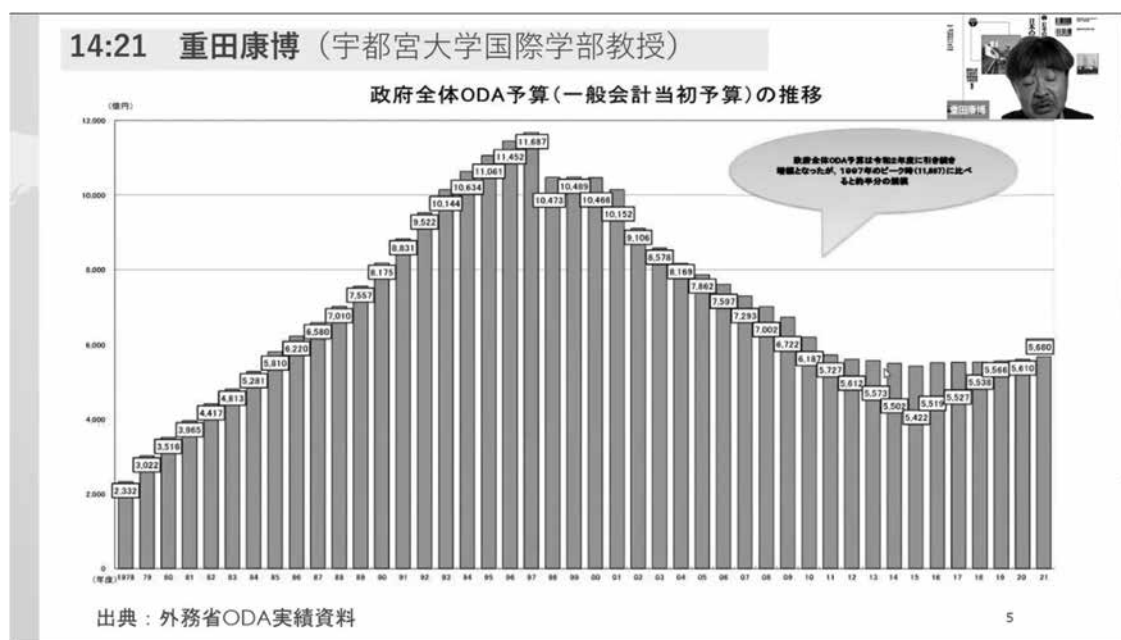
本シリーズでは、アジア、中東、アフリカ、中南米の“当たり前”の人びとの暮らしがわかるような情報を、現地をよく知る執筆者に書き込んで頂きました。シンポジウムには院生や学部生の皆さんが多数参加されているようです。『日本の国際協力』シリーズを活用され、皆さんの関心がさらに深まること、課題の発見がさらに次のステップに繋がることを願っております。

## 阪本（司会）

藤田先生ありがとうございました。続きまして重田康博先生から ODA 全般そしてアジア編についてお話し頂きたいと思います。重田先生よろしくお願いいたします。

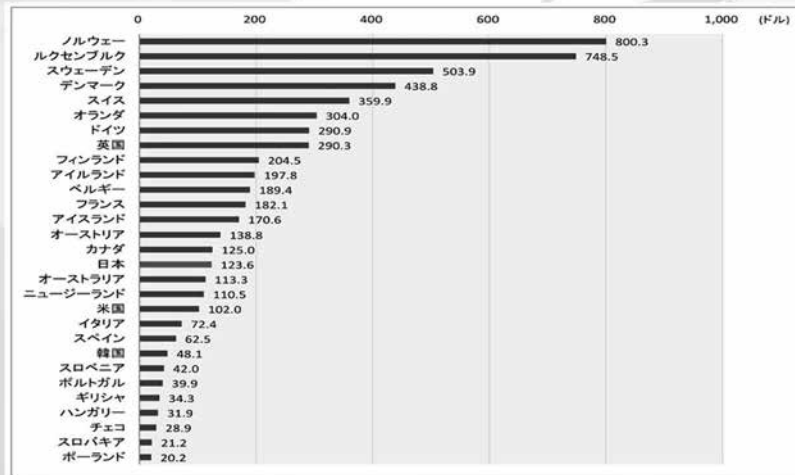
## 重田康博（宇都宮大学国際学部教授）

ただ今ご紹介頂きました、宇都宮大学国際学部の重田康博と申します。このシリーズに関しては、『日本の国際協力 アジア編』を担当させて頂きました。最初にアジア編のことを説明する前に、日本の ODA について説明させて頂きます。



私自身、国際協力には、約 35 年携わっているのですが、NGO の立場から ODA を見えました。政府全体の ODA 予算というのは、時間の都合上細かく説明することはできませんけども、1970 年代後半から中期目標でどんどん伸びていって、97 年以降から段々とジェットコースターのように下がってしまいました。三角形のジェットコースターとも思えばいいかもしれませんが、これが 1970 年代後半から 2010 年代までの日本の ODA の形です。日本経済の上昇と下降と一緒にの時期ですね。最近の予算は横ばいになっていますけれども、97 年の時の約半分ぐらいの額になっています。

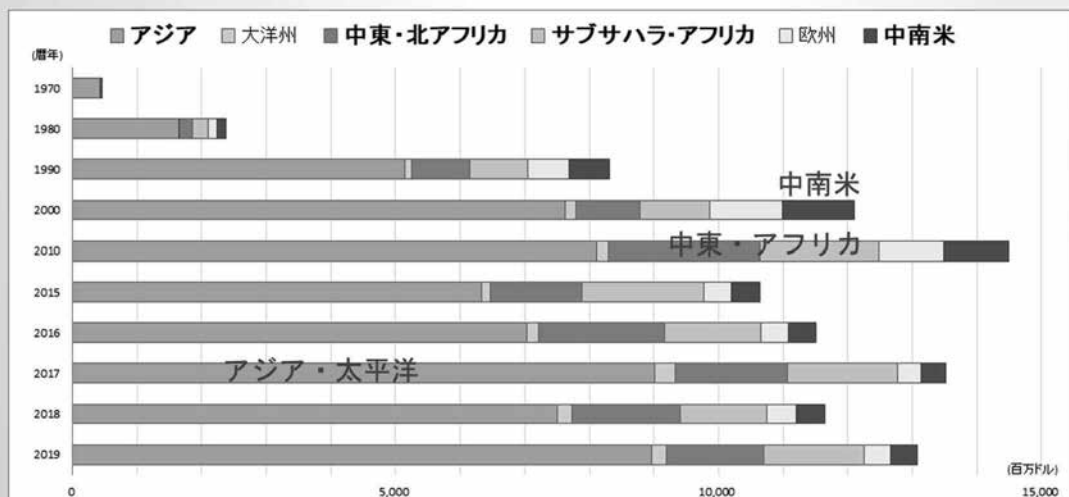
### DAC諸国における政府開発援助実績の国民1人当たりの負担額（2019年）日本は16位



出典：外務省ODA実績資料（2021年10月28日閲覧） 6

OECD 開発援助委員会（DAC）諸国の政府開発援助の実績です。国民 1 人当たりの負担額に関して、日本のODA はここに示した 29 ケ国中 16 位で、全体の半分ぐらいで、一時もう少し下になりました。北欧諸国がずっと上の順位にあって、日本の下に米国などがあります。DAC のODA 実績の推移ですが、英国、ドイツは日本より高い位置にあって、かつてトップドナーだった日本は現在では、3 位、4 位になっています。

### 日本の地域別2国間ODA支出額



出典：外務省「2020年版開発協力参考資料集 ([https://www.mofa.go.jp/mofal/gaiko/oda/press/shiryo/page22\\_001389.html](https://www.mofa.go.jp/mofal/gaiko/oda/press/shiryo/page22_001389.html)) より作成

7

**日本の二国間政府開発援助の供与相手国上位10か国（2019年）**  
（単位：百万ドル） 2021年10月28日閲覧

順位	二国間援助計			
	国または地域名	支出総額	国または地域名	支出純額
1	インド	2,699.94	インド	1,794.77
2	バングラデシュ	1,255.59	バングラデシュ	1,139.18
3	フィリピン	1,000.40	ミャンマー	756.93
4	ミャンマー	756.93	フィリピン	498.47
5	インドネシア	664.34	ウズベキスタン	384.16
6	ベトナム	650.57	ケニア	213.90
7	ウズベキスタン	412.69	イラク	212.43
8	エジプト	357.89	エジプト	161.13
9	イラク	304.40	カンボジア	154.89
10	ケニア	290.08	ベトナム	148.63

出典：外務省ODA実績資料

地域配分は二国間 ODA の供与国上位 10 カ国は、過去から現在まで、圧倒的にアジア・太平洋が多いわけです。アフリカへの支援は必要だと言われていますが、そんなにサブサハラアフリカ地域の ODA は伸びているわけではありません。ウズベキスタンは本書『アジア編』の中に入っており、純額・総額ベースでも上位 10 カ国中、多くのアジア諸国で占められます。純額ベースではアジア以外の国はイラク、アフガニスタン、モザンビーク、ケニアが入ります。総額ベースではかつての ODA 供与国であったインドネシア、フィリピンなどの国々が見受けられます。

## —アジア編報告—

重田



**日本の国際協力 アジア編**

経済成長から持続可能な社会の実現へ

重田康博・太田和宏・福島浩治・藤田和子 編著

ミネルヴァ書房

**重田康博**（宇都宮大学国際学部教授）

**重田康博・太田和宏・福島浩治・藤田和子**編著  
（2021年6月）  
『日本の国際協力 アジア編  
—経済成長から「持続可能な社会」の実現へ』  
ミネルヴァ書房